

KENBI LETTER

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

no.125

COLLECTION

ヴァシリー・カンディンスキー 《ファウスト第二部 アーリエルの場》

1908年／カードボードに油彩／41.0×33.0cm／高知県立美術館蔵



ゲーテの『ファウスト』といえばシューベルトの歌曲やグノーのオペラを想起する方が多いであろう。悪魔メフィストフェレスに死後の魂を売り渡す代わりに、現世でのあらゆる享楽を得ようとする学者ファウスト博士の物語。よく知られているのはその第一部、ファウストに弄ばれる薄幸の少女グレートヒェンの悲劇であるが、その後に荒唐無稽な第二部が続くことをご存知か。

『ファウスト』は戯曲であり、物語は台詞とト書きで進行していくのだが、その饒舌さについていくのには相当の忍耐を要する。筆者などは大学でドイツ文学を専攻していたくせに、本編が始まる前のプロローグで既に挫折した口である。

1908年、カンディンスキーはベルリンに滞在していた。人に勧められ、神智学者ルドルフ・シュタイナーの講演を聴いたのが3月26日のことである。天体をテーマにしたこの講演はカンディンスキーに多大な感銘を与えたく、聴講後すぐに絵筆を執り、描いたのがこの作品である。芝居の書割のような画面の後方には巨大な虹が描かれている。グレートヒェンとの悲恋に疲れたファウストを慰めるのは宇宙の森羅万象であり、虹はその象徴である。この場面のファウストの台詞はこうである。

「…しかしこの荒々しい水のすざびに根ざして、七色の虹の常なき姿が、まあ、美しく空に横わっていること。はっきりとしているかと思えば、すぐまた空に散って、匂いある涼しい戦（そよぎ）をあたりに漲らせている。この虹が人間の努力の影だ。…」(森鷗外 訳)

先のシュタイナーの講演はこの台詞を引用して結ばれていた。『ファウスト』第二部をテキストにしたマーラーの交響曲第8番の初演が行われるのはこの2年後である。この時期、ドイツではゲーテの再評価が高まっていた。カンディンスキーもその影響を受けたのは間違いないく、絶えず努め励むものは救われる」というファウストの主題は、数年後に抽象絵画へと突き進むカンディンスキーの信条でもあったであろう。 文・奥野克仁(当館学芸課長)

INTERVIEW

担当者に聞く 「手話とアートのおしゃべり時間」 企画立案について

今夏から、高知県立美術館が紹介する作品や表現を「手話」を交えながら対話する企画がスタートしました。この企画に至った背景を担当者に聞きました。

語り手・松本千鶴(企画事業課主幹兼プロデューサー)



指文字にチャレンジ！

——「手話とアートのおしゃべり時間」を始め
たきっかけは？

6月に上演した英国・スコットランドの演劇公演『Love Beyond!』がきっかけです。作・主演のラメシュ・メイヤッパンさんは、手話を第一言語とする国際的に評価の高いデフ・アーティストで、ろう者の認知症を描いた本作を迎えるにあたり、地域の方々と共にできることを考えていたとき、近年、かるぼーとや薬工ミュージアム主催の舞台に出演されている尾崎里美さんが、手話カフェの講師を務めていると知り、ご相談したことから始まりました。

——初開催の様子を聞かせてください

手話の経験にかかわらず気軽に誰でも参加しやすい空間にしたいと思い、初回は美術館1階のカフェ・マルクを会場にプチアフタヌーンティーを囲んで開催しました。指文字の五十音表を見ながら自己紹介をしたあと、「イギリス」や「演劇」

から連想する言葉を、手話やジェスチャーでつなくゲームと、指文字カルタに挑戦しました。思いがけないシナリオが生まれる即興演劇のようで、笑顔の絶えない時間になりました。

——今後、どのようなプログラムにしていきたい
ですか？

展覧会や映画上映、その時々のごれぞ！と思うテーマや手話を入り口に、クリエイティブな対話が広がる場に少しずつ近づけたらいいですね。今回の初開催でも、手話への関心から初めて美術館を訪れた方、アートが好きで初めて手話に触れた方と様々でした。聞こえ方も興味も異なる人たちが、「伝えたい」の一心で、手振り身振り、表情、口話を駆使して、「分からない」から「分かち合いたい」に前向きに変わっていく姿に胸が熱くなりました。視覚的なコミュニケーションの可能性を今後も地域の方たちと共有していきたいです。

Exhibition Report

1 「高知の前衛 高崎元尚と浜口富治」展を振り返って

2026年2月28日(土)ー3月31日(火)|当館展示室B・C

1960年代の高知の前衛美術を振り返る



《理由なくデモして街を歩く》(高知市帯屋町界展でのパフォーマンス風景) 1961年、個人蔵

Project in Progress

石元泰博・コレクション展 「ALMOSTBLACK×ISHIMOTO」



中嶋峻太さん

石元泰博フォトセンター注目のコラボレーション

高知ゆかりの写真家・石元泰博とコラボレーションしたアイテムを発表されたメンズファッションブランドALMOSTBLACKのデザイナー・中嶋峻太さんにお話を伺いました。

聞き手・朝倉芽生(当館学芸員)

Q ファッションを志したきっかけは？

中学生の時にサッカーをしていたのですが、先輩からユニフォームやスバイクなどをもらったりするなかで、私服ももらうようになったのが、ファッションに興味を持ったきっかけです。高校生になってからは古着にハマり、ファッションの道に進もうと決めました。

Q ALMOSTBLACK設立のきっかけやコンセプトは？

現在PRADAのディレクターをしているラフ・シモンズの個人ブランドで、20代の頃インターンをしていました。周りのスタッフたちが自らの出身国を愛しプライドを持って仕事をしているのを目の当たりにして、自分もいつか日本で自分のブランドを始めたいと思ったのがきっかけです。ALMOSTBLACKは直訳すると“ほとんど黒”ですが、平安時代からある“褐色”を意味しています。褐色は、現代ではデニムで使う藍色を打って素

高崎元尚と浜口富治という、1960年代の高知の前衛美術を牽引したふたりの作家の歩みを通して、当時のアートシーンを振り返ってみよう——そう考えるに至ったのは、ふたりの旧蔵資料が大量に「発見」されたからです。プライベートなアルバムや手紙から、展覧会の目録、作品写真まで。作品はもちろんのこと、こうした膨大な資料もまた、雄弁に当時の熱気を語っていました。

また、本展では、図録にもご寄稿いただいた美術史家・富井玲子氏が提唱する「オペレーション」という概念を参照しました。富井氏によれば、作品は展示・批評・教育・メディア・人的ネットワークといった「作品を社会化する回路の総体」を通じてはじめて社会のなかで意味をもちます。この視点に立つと、目の前の作品だけでなく、それがどのように発表され、語られ、人々と結びついていったかが具体的に見えてきます。

ローカルな美術史を扱った企画ではありますが、そこには1960年代の日本美術全体を考えるうえでも見逃せない論点が含まれています。作品と資料の両面から、その一端に触れていただけたなら幸いです。

文・塚本麻莉(当館学芸員)



2,700円(税別)にて
図録兼書籍を
販売中です！

Exhibition Report

報告

2 レオ・レオーニと仲間たち

2026年4月24日(金)ー7月2日(木)|当館展示室B・C

読書コーナー



展示室の読書コーナーでは本をじっくり読む人も

ふらっとアート体験コーナー



会期中はフロッタージュが体験できました



講演会の様子

大盛況で終わりました！

レオ・レオーニはデザイナー、画家、絵本作家と多彩な活動をしました。日本では、なんとといっても教科書に載っている「スイミー」などの絵本で知っている人が多いでしょう。四国初のレオーニ展となった本展は、デザイン、絵画、彫刻などを交えたレオーニの仕事の全体像、さらに交流のあったアーティストを紹介するまさに「決定版」の展覧会でした。記念講演会として本展企画者の板橋区立美術館館長・松岡希代子さんによる講演会を行いました。本来50人定員の講義室に60人以上の人が来る

ほどの大盛況！会場は熱気ですごいことに……！カラフルなワンピースで登場した松岡さんは生前のレオーニとの話や調査のときの写真を交えながらその絵本の源泉とレオーニが何を伝えようとしていたのかをお話ししてくださいました。本展を通じて絵本作家として知られたレオーニの新たな一面を感じていただけたのではないのでしょうか。

文・柳澤宏美(当館学芸員)

Q 石元写真のどのようなところに惹かれますか？

石元泰博氏の写真は、形や色へのファークスがとてもモダンでとても美しい。そこに興味を惹かれ、コラボレーションしたいと考えました。コレクションでは、石元作品からインスパイアされた素材や形に注目してもらいたいです。

Q 石元の他にも、画家の白髪一雄や写真家の細江英公などとも コラボレーションされています。日本のアーティストたちとの コラボはどのような経緯で始まったのですか？

まずは自分自身が「アートが好き」というところからスタートしました。たくさんさんの日本のアーティストの方々が世界で活躍し、評価されているので、同じ日本人として、まずは日本のアーティストとコラボレーションができたら良いなと思いスタートしました。アーティストの関係者の方や、家族の方とお話しをするなかで、本には載っていないようなエピソードなども沢山聞くことができ、多くの発見がありました。契約にあたっては色々なハードルがあるため難しく、断念する場合もあります。コレクションへの反響はとても良く、お客さまに洋服を通じてアーティストのことを知っていただけたら、アーティストのファンの方に買っていただけたら嬉しいです。

Q 今後挑戦されたいことはありますか？

より個人として純度の高いものを作りたいと思っています。



2025年秋冬コレクションより Photo: Ryota Sakai



《HANA 蓮》
1986-87年

©Kochi Prefecture,
Ishimoto Yasuhiro Photo Center

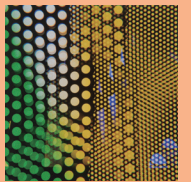


2026年春夏コレクションより Photo: Ryota Sakai



(左図)《包まれた食物(バナナ)》
1984-85年
(右図)《色とかたち》
撮影年不詳

©Kochi Prefecture,
Ishimoto Yasuhiro Photo Center



ドイツの現代美術作家アンゼルム・キーファー（1945-）は高松宮殿下記念世界文化賞を受賞（1999）しているだけでなく、昨年、京都・二条城での個展が好評だったことが記憶に新しい。ナチス・ドイツ敗戦の直前に生まれたキーファーは、ナチズムおよび冷戦下の東西分裂という負の歴史を意識し、さらには人類の記憶や歴史全体を省察するような作品を創り続けている。当館では夏の『コレクション特集展示I 戦争』（7月19日～9月22日）でキーファーの大作《アタノール》（1988-91）を展示しているが、今回はこの作品から派生して脱線気味の雑談を書くことにしたい。

《アタノール》に描かれた建物はオスロにあるノルウェー中央銀行だという研究者の指摘があるそうで（ノルウェーは第二次世界大戦中ナチス・ドイツに占領された）言われてみると確かに似ている。なぜ知っているかというと、20世紀初頭に建てられたこの建物、実は1990年から2017年まで国立現代美術館（Museum for Contemporary Art / Museet for samtidskunst）になっており、私も3回ほど訪れているからだ。私はかつて東京・品川にあった原美術館に在職していた頃、オスロ国立現代美術館のチーフキュレーター、カーリン・ヘランショーと2度ほど企画展で協働した。その一つは「ノルウェー現代美術の3人：場としての表現」（原美術館、1997）で、その準備でオスロへ招いてもらった

のが最初の訪問であった。帰国の日、カーリン・ヘランショーが空港まで運転して送ってくれただけでなく、まだ時間があるからとわざわざ観光名所のヴァイキング船博物館に案内してくれたのはありがたかった。現代美術館＝中央銀行はオスロ中央駅から徒歩圏内にあり、威厳のある空間ではあったが、転用・再利用施設にありがちな、現代美術館としてはいかにも使いづらそうな場所であった。聞く日本で言う文化財相当の建物なため、展示のための空間造作にも制約があるのだという。それだけが理由ではないが、ここでの活動は30年弱で終わることになった。

オスロにはもともと他にも国立美術館（Nasjonalgalleriet）など複数の国立ミュージアムが分散して存在していた。2022年、それらを市内中心部の一カ所にまとめた上に新築で超巨大な国立美術館（National Museum of Art, Architecture and Design）に統合したのが現在の姿である（こちらはまだ未見なのだが）。新・国立美術館の近くには他にも私立のアストルップ・ファーンリー美術館（Astrup Fearnley Museum）があって、レンゾ・ピアノ設計の空間に国際的な現代美術のコレクションが充実している。そんなわけで、オスロは美術館的にも（ムンク美術館だけでなく）なかなか見どころのある街なのである。 文・安田篤生（当館館長）



オスロ国立現代美術館の外観

久々の新人職員！ 舞台でのホール事業を担当する柴田さんは、どんな「なかのひと」なのでしょう？

美術館のなかのひと



簡単に自己紹介をお願いします。山形県出身で、高知に来て5年になります。前職では、県内34市町村を回って取材をし、映像制作を行ってきました。その中高知に魅了され、もともと好きだった芸術や映画に関わる仕事に就きました。

職員として採用される前「高知県立美術館」ってどんなイメージでしたか？

以前から映画上映会や展覧会を観に来ていました。全国的に見ても他にはない、独特な舞台や展示が多い印象がありました。特に昨年の「COLD BLOOD」は衝撃的で、なぜこれほど素晴らしい作品が高知のみで上演されたのか、不思議でなりませんでした。

職員として採用されて数か月が経ちますが実際に働いてみてどうですか？

職員として採用されて数か月が経ちますが実際に働いてみてどうですか？

がある意味を実感する機会でした。また、まだ数か月ではありますが、30年以上にわたって、都会の劇場の模倣ではなく、「ここでしか味わえない体験」を大切に、地方から新作上演や海外アーティストの招聘に取り組んできた歴史が、当館の強みであることを肌で感じています。

最後に抱負をお願いいたします。自分の提案次第で、想像以上に自由に取り組める職場だと感じています。県内外の方に舞予想通り個性的な先輩方ばかりで、穏やかな雰囲気の中で楽しく働かせていただいています。先日、11月公演を予定しているカンパニーデラシネラのお二人が来館され、実際に美術館の展示を見たり映画の話をしたる中で、さまざまな要素が越境しながら新作のインスピレーションを膨らませていく様子に、心躍りました。まさに美術館に劇場



冬の定期上映会
高知県出身の映画プロデューサー

生誕110年 大塚和 特集

家族の中の大塚和 一ふるさと高知がつなぐ記憶

トーク中のダースレイダー氏

2026年2月7日（土）8日（日）美術館ホール

高知県南国市出身の映画プロデューサー・大塚和のおつかの。日本映画史に残る数々の名作を世に送り出したその足跡をたどる特集上映会を、雪の舞う2026年2月に開催しました。生涯に手がけた110作品の中から厳選した8作品を上映。高知県沖の島を舞台にした『孤島の太陽』をはじめ、豚と軍艦「競輪上人行状記」などの作品がスクリーンに蘇りました。また、大塚のご令孫でラッパー／ミュージシャンとして活躍するダースレイダー／和田礼氏をトークゲストに迎え、家族の視点から見た大塚の人物像や思い出を紹介。上映作品をより身近に感じる機会となりました。家族4人で高知を訪れたダースレイダー氏には、祖父との記憶とともに、高知で過ごした時間について振り返っていただきました。

大塚和の思い出

文・ダースレイダー

「カツオ！カツオ！」娘たちの大合唱。ひろめ市場の奥の座敷のテーブルには隣のやい亭からカツオ塩タタキが運ばれてくる。大喜びで肉厚のカツオ塩張る娘たちを僕と妻は眺める。やつと家族と高知に帰ることが出来た。僕の母方の祖父、大塚和は高知出身の映画プロデューサーだ。高知県立美術館が祖父の映画特集を組んでくれた。僕は孫として上映後のトークに登壇した。会場には親戚も集まってくれて久しく忘れていたかつての大家族を思い出した。かつては正月などはすごい人数の親戚が集まったものだ。娘たちは祖父どこか僕の母にも会ったことがない。でも、自分たちのルーツの一つはここなんだよとなんとなくでも感じて欲しかったのだ。僕は映画プロデューサーとしての祖父はほとんど知らない。祖父はいつもセーターを着て代沢にある家の居間の決まった席に座り、テレビで国会中継を見

ていた。寡黙だがニコニコしている。お酒をよく飲む。祖母はめちゃくちゃおしゃべりだったので余計に祖父は静かに見えた。僕は子供ながらに、その静けさの中に不思議な強さ、芯のようなものを感じていた。長野の蓼科の山荘に遊びに行っていた時、部屋にスズメバチが飛び込んだ。僕は弟はギョッとして固まっていたが、祖父はニコニコしながら素手でヒョーッと蜂を包むようにして窓の外に逃した。大人になってから祖父の作った映画を観るとそこにググッと祖父の芯が埋め込まれているように感じられた。僕や娘たちにもこの芯は何かしら受け継がれているのだろうか？「高知、どうだった？」と娘たちに聞くと「カツオが美味しかった！」と即答だった。



ダースレイダー DARTHREIDER
（ラッパー／MC）

1977年パリで生まれ、幼少期をロンドンで過ごす。2000年に MICADELIC のメンバーとして本格デビュー。近著に「イル・コミュニケーション-余命5年のラッパーが病気を哲学する-」（ライフサイエンス社）。大阪府にある国立民族学博物館人類文明誌研究部の特別客員教員に就任。Darthreider & The Bassons としても世界中のフェスで活躍する。2026年6月、最新アルバム「壁掛け」をリリース。



撮影：松尾加奈 提供：東京芸術劇場

『ラブ・ビヨンド』が 伝えてくれたこと

『ラブ・ビヨンド』を知った時、ろう者でアーティストであるラメシュ・メイヤッパン氏がなぜこの作品を作ろうとしたのか興味を湧いた。私は31歳の時突然難聴になった。それから30年、聞こえない世界で生きてきた「聞こえる」人生も「聞こえない」人生も過ごしてきた私にとってこの作品は、様々なことを考えさせるものだった。

耳が聞こえなくなった当時に感じた苦しきや孤独。楽しそうに話している輪の中に自分だけが入れない感覚。相手の言葉が分からないもどかしさ。理解すること諦めた。作られた過去の自分を思い出した。作品を観ていくうちに、あえて字幕をつけずに上演した意味が少しずつ分かってきた。私自身、日本手話はできて英語や英国手話は分からない。それでも私を含め、あの場にいた観客たちは一体となつて、ラメシュ氏が伝えようとしていることを理解しようとしていた。その時、改めて感じた。コミュニケーションの本質は、言語ができることではない。相手が伝えたいことを諦めずに理解しようとする気持ちこそが大切

なのだ。そして、ろう者が日々「分からなさ」の中で暮らしている感覚を、観客に感じてもらいたかったのではないだろうか。東京芸術劇場で開催されたろう者の俳優向けワークショップでも参加することができた。講師はラメシュ氏。ろう者は無意識のうちに周囲の動きを観察し、伝え合い、理解し合っている。その力は、日頃から演じることに携わる参加者たちに特に際立っていた。参加者全員で輪になり、動いていく。安心してコミュニケーションの取れる環境が心地良かった。と同時に、私の第一言語は手話になったのだとも気づかされた。ワークショップでは、いかに手話に頼らず視覚的にどう相手に伝えるか、指の先まで意識し

尾崎里美
（手話カフェ講師／俳優）

病院や学校で手話ボランティアや講演を行なう他、手話カフェの開催や、障害の有無に関わらず参加できる演劇やミュージカルに出演するなど、子どもから大人まで集めるコミュニティを立ち上げ活動中。



ことばを超え心震わせた“グランドフィナーレ”

A Raw Material & Vanishing Point Co-Production

『ラブ・ビヨンド／Love Beyond (Act of Remembrance)』



撮影：西野正将 提供：KAAT 神奈川芸術劇場

2026年6月19日（金）・20日（土）美術館ホール



撮影：西野正将 提供：KAAT 神奈川芸術劇場

メイヤッパン シンガポールで活動していた頃、聴者の演出家がマイムを取り入れて創作する姿に刺激を受け、言語に頼らず物語を立ち上げる演劇に惹かれていきました。やがて、シェイクスピアのような豊かな言語で書かれた戯曲を、手話を使わず視覚的に表現できないかと考えるようになり、身体表現だけで構成



聞き手：松本志帆子
（薬工ミュージアム学芸スタッフ）

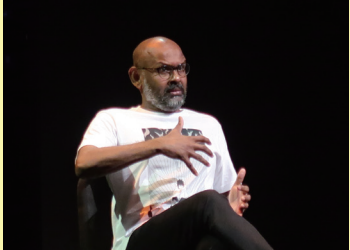
2010年薬工ミュージアムに着任。開館準備から運営に関わり、展覧会やワークショップ、演劇・音楽公演、映画上映会などを企画・実施。障がいのある方の表現活動の支援や人材育成なども行う。

松本 スコットランドと日本、異なる文化背景をもつ私たちにとっても、誰もが心を寄せられる普遍的で美しい作品でした。手話を取り入れた演劇というより、手話と身体表現が自然に溶け合う視覚的な舞台だと感じました。鏡、机と椅子を使ったダンス・マイム、そしておそらく手話ではない身体表現。これまでに見たことのない表現に高知で出会えたことに感激しました。こうした表現は、どのような発想から生まれたのでしょうか。

メイヤッパン シンガポールで活動していた頃、聴者の演出家がマイムを取り入れて創作する姿に刺激を受け、言語に頼らず物語を立ち上げる演劇に惹かれていきました。やがて、シェイクスピアのような豊かな言語で書かれた戯曲を、手話を使わず視覚的に表現できないかと考えるようになり、身体表現だけで構成

松本 人形劇や視覚的な表現など、要素の取り入れ方に関して本作では「動き」だけでなく、鏡や、音による揺れなども印象的な要素でした。メイヤッパン 『ラブ・ビヨンド』の着想には、老夫婦の片方が認知症になる姿を描いた M・R・ジェームズの短編怪談の翻案作「Oldest Stories」がありました。認知症とろう者というテーマが浮かび、当事者への取材を重ねるなかで、認知症が進むと手話さえ失われる場合があると知り、大きな衝撃を受けました。手話に頼りすぎず、それをどう視覚的に表現するか試行錯誤を重ねるなかで「鏡」という素材に出会い、演出家マシュー・レントンとともに、鏡を軸とした視覚表現と、主人公が英国手話を少しずつ忘れていく身体表現を形づくりました。作品を通して描きたかったのは、ゆっくりとコミュニケーションが揺らいでいく過程です。

松本 私自身、英語も英国手話も分かりません。それでも、聴者とうろ者のすれ違いから始まり、看護師メイが手話を覚え、やがてハリーが手話を忘れていく、その変化は、言葉を介さずともまっすぐ伝わってきました。客席では鼻をすする音が聞こえ、視覚的な表現だけで物語が届いているのだと感じました。聞こえる・聞こえない、英語が分かる・分からないを超え、それぞれの人生に静かに響く作品でした。



「ラブ・ビヨンド」作・主演
ラメシュ・メイヤッパン（Ramesh Meyyappan）

手話の先にある物語

登壇：ラメシュ・メイヤッパン（作・主演）、松本志帆子（聞き手）